

浜松の民芸運動の現代的評価に向けて

著者名(日)	黒田 宏治, 阿蘇 裕矢
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	13
ページ	149-152
発行年	2013-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000652/

浜松の民芸運動の現代的評価に向けて

Towards the Evaluation of the MINGEI Movement in Hamamatsu

黒田 宏治
デザイン学部生産造形学科

Kohji KURODA
Department of Industrial Design, Faculty of Design

阿蘇 裕矢
文化政策学部文化政策学科

Yuya ASO
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

浜松の民芸運動は、浜松の新たな文化やデザインのアイデンティティとなる可能性がある。本稿では、浜松の民芸運動について、郷土史家へのインタビューと地元資料に基づく概略年表整理を行った。浜松の民芸運動の現代的評価に向けて、引き続き研究調査を行ってきたい。

The MINGEI Movement in Hamamatsu may become a new identity of culture and design of Hamamatsu. In this paper, we performed the interview to native district historiographer and the outline chronological table rearranging based on some local documents, about the MINGEI Movement in Hamamatsu. Towards the evaluation of the MINGEI Movement in Hamamatsu, we like to continue to do the research.

いま民芸という言葉からは、地方の民具や骨董、古道具など、やや古臭いイメージをもつ向きも少なくないだろう。確かに古い民具の発掘・収集は民芸運動の一面ではあるが、いささか歪曲して捉えられているようなところもあり、そのような解釈の範囲に留まっては民芸の本来の意味内容の理解に欠くと言わざるをえないだろう。

そもそも民芸とは、大正末期（1920年代中頃）に柳宗悦らが生み出した言葉である。民衆の工芸を略して民芸としたものであり、貴族的な工芸美術に対比される民衆的工芸を指す概念であった。柳宗悦が、民衆のなかで普段使われてきた無名の職人の作の器具に美を見出し、はじめは雑器や下手物と呼んでいたが、いささか語感上の問題もあり、そこに民芸の語が生み出されることになったわけである。

そして、柳宗悦を中心に取組まれた民芸の発掘・収集、展示・公開、新たな民芸品の創作・普及などの一連の活動展開が、民芸運動と呼ばれている。大正15年（1926年）の「日本民藝美術館設立趣意書」の発表、昭和6年（1931年）の月刊雑誌『工藝』の創刊、昭和11年（1936年）の「日本民藝館」（東京・駒場）の開館などが民芸運動の草創に位置づけられ、それらを契機に全国各地に民芸館が順次開設されてきた。現在、全国各地に29の民芸館が数えられるに至っている。¹⁾

ちなみに、2012年7月に、「日本民藝館」の5代目館長に工業デザイナーの深澤直人が就任したが、冒頭に記したような古風なイメージを払拭するとともに、民芸運動への新風を期待されてのことだろう。新館長就任にあたっての深澤の「『民芸』を現代の言葉に置き換えれば、『デザイン』そのもの。人のために美しいものをつくるということに変わりはない」²⁾との発言は、民芸の新たな現代的解釈を示唆するものでもある。

しかしながら、そのような民芸運動の発端をなす最初の民芸館が浜松に建てられたという歴史的事実はあまり知られていないようである。柳宗悦の提唱する民芸運動に共鳴

した高林兵衛、中村精、内田六郎らの尽力もあって、積志村（現在の浜松市有玉）の高林邸内に日本で最初の民芸館である「日本民藝美術館」が開設されたのが、昭和6年（1931年）4月のことであった。この民芸館は2年ほどで閉館することとなり、久しく忘れられた存在となってきたが、1980年代以降に伊東政好、鈴木直之らの郷土史家の努力もあって、関係情報資料の発掘・編纂や民芸運動史の中への位置づけなどが進められてきた。そのような経緯もあってのことだろうか、浜松市における新美術館構想において、「浜松の民芸運動」は美術館建設に連なる市民文化ムーブメントの一大契機として記述されている³⁾。

いま、日本で初めての民芸館を立ち上げた浜松の民芸運動は、浜松の一つの文化のアイデンティティであり、デザインのアイデンティティであると、改めて位置づけることができるのではないだろうか。そのような考えのもと、まずは浜松の民芸運動に詳しい伊東政好へのインタビュー調査（第1次）を行うとともに（→【資料1】参照）、関連資料の収集に努め、浜松の民芸運動の概略年表を試行的にとりまとめた（→【資料2】参照）。

これら調査作業を出発点にして、引き続き関係のインタビュー調査や情報資料の調査・収集、関連の論文・資料の収集・考察などを行い、近代デザイン運動史との関連なども勘案しつつ、浜松の民芸運動の現代的評価に向けての調査研究を行っていきたく考えている。

【資料1】浜松の民芸運動について（その1）

（伊東政好（遠州民芸同好会会長））

私は生前の平松実、ざざんざ織の創設者といろいろと縁がありました。その平松実から浜松にあった「日本民藝美術館」の話を知り、これは資料を集めなければいかんと思ひ、それで集め始めて「遠州民芸運動資料展」を昭和56年4月にやりました。それで翌5月に遠州民芸同好会を設立して、民芸関係の勉強会を始めました。それ以来のことになりますでしょうか、私が浜松の民芸運動につ

いているいろいろ調べ始めましたのは。

民芸運動の中心人物は柳宗悦です。彼は明治22年生まれ、彼の父は少将で裕福な家庭でした。東大では哲学を専攻し、白樺派の同人として活動する中で、陶芸とか美術に関心をもつようになります。それで朝鮮に行ったときに李朝の陶芸の美に出会い、それで雑器に目覚めることになります。そして大正末期になりますが、河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉らと議論する中で、民衆的工芸という意味で民芸という言葉をつくりました。ですから、民芸という言葉はできてから90年くらいないんですね。そして、河井寛次郎、浜田庄司と柳宗悦の3人で紀伊半島に木喰仏を探しに行く途中でしたか、高野山の宿坊で「日本民藝美術館設立趣意書」というものを起草するに至ります。

その趣意書が、浜松にいた平松実の弟で中村家に養子に行った中村精に伝わったんですね。柳宗悦と中村精は宗教哲学が縁で文通をしていたらしいんです。中村精は設立趣意書を見て感激して、柳宗悦を一度浜松に呼ぼうということになりました。それで昭和2年1月12日のことですが、浜松の尾張町の中村家で中村精や内田六郎らが柳宗悦の民芸論を聞くことになりました。その翌日、中村精は柳宗悦を有玉の大庄屋である高林家に案内することになりました。柳宗悦の話聞いて高林兵衛も感銘を受けたわけで、それで日本民藝美術館は高林家の場所を使ったらどうかという話が出て、それが契機となって昭和6年4月18日に浜松において「日本民藝美術館」が開館することになるわけです。

でも本当は、柳宗悦は日本民藝美術館を東京につくりたかったみたいですね。だけど片田舎の浜松に開館することになり、浜田庄司や黒田辰秋はじめ柳宗悦の関係で見に来た人はいたと思いますが、浜松といっても駅から電車に乗り換えて有玉まで行くかたちで、当時はほんとうに寂しいところでしたから、たぶん見学者はそんなに多くなかったでしょう。民藝美術館になった長屋門と草屋は、茅葺きを銅版に葺き替えられましたが、いまでも有玉の高林家に残っています。当時は柳宗悦が書いた木札が長屋門にかかっていたようです。

少し遡りますが、昭和3年の御大礼、そのとき東京の上野公園で大博覧会（御大礼記念国産振興博覧会）があって、柳宗悦らは日本のこれからの民家というか、食器や什器等調度品揃えた一般大衆の家のモデルを展示するんです。そのときに建物が高林兵衛が担当し、大工や瓦師などを全部高林家出入りの職人から連れていったんです。それで上野の博覧会に民藝館が開設されました。その建物が博覧会終了後に大阪に移設され、後の朝日ビール社長の山本為三郎に引き取られて別荘になっていくわけです。それが有名な三国荘です。

そうこうするうち高林兵衛は事業家ですから、作った民芸品を百貨店で販売するよう柳宗悦に提言していくんです。それから高林兵衛は和時計のコレクターでも有名でしたが、和時計の縁で益田孝や松永安左衛門といった財界人につきあいができ、民芸村構想への資金協力を呼びかけるわけです。そのあたりから柳宗悦との間に軋轢が生まれ、高林兵衛は柳宗悦との関係が切れていくことになります。そんな経緯もあってか、浜松の日本民藝美術館は開館から2年しか続きませんでした。昭和8年の夏頃に閉館とされ

ていますが、展示品がさみだれ式に持ち出されていったようで、実は何日が閉館だかよくわからないんですね。

その後ですが、現在の「日本民藝館」が昭和11年に東京の駒場にできるんです。柳宗悦は財界には協力を求めないと言っているが、倉敷レーヨンの大原孫三郎の資金援助のもとつくったわけですね。開設にあたり、あくまでも柳宗悦の求めたのは民衆的工芸なので、美術という名称に非常にこだわり出すんですね。美術を外さねばいかん、実用品ですから、そういうことで最終的に日本民藝館の名称になったようです。いま全国に29館ある民芸館の中で名称に美術が入っているのは鳥取民藝美術館、あそこだけです。浜松に残ってれば二つだったかもしれません。

昭和6年に開館した日本民藝美術館の功労者は高林兵衛ですが、中村精が浜松の民芸運動では一番の中心人物だったといえます。中村精は、慶応を卒業して浜松に戻り、創設されたばかりの遠江商業学校の教員を経て、誠心高等女学校の教員になります。そこで丘の上工芸クラブをつくって工芸の指導にもあたります。その間に静岡の芹沢銈介とも知り合い、浜松で展示会なども手掛けるなど、民芸運動にも携わります。それが昭和14年に慶応に呼び戻され、それで浜松の民芸運動の主になる人がいなくなったみたいなのところがあります。中村精は、東京に行ってから雑誌「民芸手帖」（昭和33年刊）の編集や東京民芸協会（昭和29年発足）の活動など、民芸運動にはかかわっていましたが、少しずつ遠州とのつながりが切れていきました。

そういえば後になって、柳宗悦が民芸運動を振り返って『民藝四十年』（宝文館、昭和33年）という本をまとめるんですが、その中の年表に浜松のことが一行も出てこないんです。結局、日本民藝美術館当時の高林兵衛との軋轢というか、そういう気持ちが柳宗悦の気持ちにあったんだと思いますね。柳宗悦に師事した鈴木繁男という磐田の人がいましたが、最後に柳宗悦が鈴木繁男に「遠州の人に悪いことをしたな」と言ったようなことを聞いたこともあります。まあ、いろいろ関係者からの指摘もあったようで、民芸運動の年表のこのごろの版（『民藝四十年』（岩波文庫））では浜松に開館したことぐらいのことは書かれるようになりました。

そういう中で、私たちも東京の日本民藝館（日本民藝協会）とは交流はしていましたが、民藝館の方で夏期学校というのを全国各地で昭和48年から毎年やってるんですけど、遠州は民芸発祥の地でもあるのでやってくれないかという話に来て、それでは夏期学校はやろうかと平成3年にお手伝いさせていただきました。奥山の方でやりましたが、柳宗理も来ましたね。そのときに東京の日本民藝協会の支部のようなかたちで遠州民芸協会ができて、私の主宰する遠州民芸同好会とは別の団体ですが、そちらは近年はあまり活動はしなくなっているようです。

さて、戦後の浜松における民芸品のものづくりの関係ですが、ざざんざ織の平松実はこつこつと自分のざざんざ織を織っていきますが、終戦後に浜松に帰ってきた高林兵衛の弟の水野良知にも教えていき、そちらは後に伊兵衛織になっていきます。ですから現在は、同じ絹織物で、浜松にはざざんざ織と伊兵衛織があります。ただ両方ともいまは細々と活動しているといった感じですね。遠州綿紬はずいぶん頑張っていますね。あと民芸運動の関係では、芹沢銈介

について勉強した山内武志のぬいや工房が板屋町で染織をやっていますし、木工関係では佐藤町に丸東工芸舎、各種民芸品を扱う渥美ゴザ屋が鴨江にあります。いま浜松での民芸運動の系譜で残っているのはそんなところですか。今後、浜松で民芸運動をどう評価し、位置づけていくかは課題だと思っています。(文責：黒田)

*本稿は、2012年9月8日に伊東政好氏のオフィス(浜松市中区板屋町)で行ったインタビューの記録である。



写真1：伊東政好氏インタビュー風景
(写真右奥が伊東政好氏、左手前が黒田、撮影は阿蘇)

【資料2】浜松の民芸運動に関わる動き(年表)

大正15年(1926年)～昭和元年

4月 『日本民藝美術館設立趣意書』を发表・配布(4月1日付、富本憲吉、河井寛次郎、浜田庄司、柳宗悦の4名の連名) 发表の後に、浜松市在住の中村精が設立趣意書を受け取る。

昭和2年(1927年)

1月 柳宗悦が浜松市(尾張町中村家)に招かれ小講演「工芸品の美」を行う(1/12)。→講演要旨を中村精が浜松仏教会機関誌「開発」に掲載(1/15)。講演翌日(1/13)、中村精が柳宗悦を積志村(現浜松市有玉)の高林兵衛邸に案内。
*民藝品の蒐集依頼と和時計等収集品紹介のため。高林は民芸運動に感銘。

2月 柳宗悦『工藝の協団に関する一提案』を執筆・配布。

3月 京都に上加茂民藝協団発足。
→約2年で解散に至る。
→発足後、高林兵衛が、鳥谷成雄(日本楽器)の木工デザイン指導のため協団の黒田辰秋を浜松に招聘。京都に出かけ協団の実態調査を行う。

6月 「第1回日本民藝品展覧会」東京銀座・鳩居堂で開催(日本民藝美術館主催)。

この年に、高林兵衛、内田六郎が静岡の芹沢銈介を柳宗悦に引き合わせる。

昭和3年(1928年)

3月 柳宗悦ら民芸同人、上野公園の御大礼記

念国産振興博覧会に「民藝館」を出展。
*建築は高林兵衛が遠州の大工や瓦職人を連れて上京し陣頭指揮。什器類の製作は主に上加茂民藝協団が担当。
*博覧会終了後、山本為三郎が「民藝館」を購入し大阪の自邸内に移設(三国荘)。

このころ、高林兵衛、中村精のすすめで平松実は手織物を始める。

昭和4年(1929年)

3月 「第2回日本民藝品展覧会」京大毎会館で開催(日本民藝美術館主催)。
*ここに高林兵衛蔵、内田六郎蔵、芹沢銈介蔵の民芸品も展示される。

このころ、高林兵衛が日本宅の古材を活用して自邸内に民藝館を建設。

この年の秋、浜松市中島町に民芸織物の平松実工房を創設。

*上加茂協団の青田五良と共同で手織物の研究を行う。両氏は昭和9～10年に作品二人展を東西ギャラリーで開催。

昭和6年(1931年)

1月 月刊雑誌『工藝』創刊。当初は芹沢銈介が装幀を担当。

4月 高林邸内(現浜松市有玉)に「日本民藝美術館」開館(4/18)。
中村精、誠心高等女学校に転任。学校に工芸部をつくる。

5月 水沢澄夫の手で民芸店「水沢」が東京・京橋に開店。→約半年で閉店に至る。

9月 民芸店「水沢」主催で浜松市鴨江寺真言院で「諸国新工藝品展覧会」開催。

10月 浜松誠心高等女学校が「染織染色展覧会」を開催。
*展示品は「日本民藝美術館」(高林邸内)の所蔵品が主。

昭和7年(1932年)

1月 高林兵衛出資の民芸店「みなと屋」が東京・銀座に開店。

*鳥谷成雄作の木工品等を取り扱う。柳宗悦には不評。約2年で閉店に至る。

4月 外村吉之介(山口在住、後の倉敷民藝館館長)、柳悦孝(京都在住、柳宗悦の甥)が平松実工房に入る。

6月 民芸店「水沢」主催で浜松市鴨江寺真言院で「第2回諸国新工藝品展覧会」開催。

7月 積志村に西ヶ崎工房を設置(外村吉之介、柳悦孝の染織の仕事場)。
*高林兵衛の斡旋で元銀行支店建物を工房に利用。

この年末、浜松市紺屋町に平松実が民芸織物工房「あかね屋」を出店。

このころより、高林兵衛は民芸運動を離れ、農村医療制度確立に打ち込む。

*中心は高林兵衛(積志村産業組合長)、鈴木正一(富岡村産業組合長)。

昭和8年(1933年)

1月 あかね屋主催による「染織物大展覧会」

- を浜松商品陳列所で開催。
 * 芹沢銈介、外村吉之介、柳悦孝、平松実が出品。高林兵衛、内山六郎ら推薦文。
- 3月 東京・高島屋で「新興工芸総合展」開催(日本民芸美術館主催)。
- この年夏頃、「日本民芸美術館」(高林邸内)閉館。
- 8月 浜松商品陳列所主催で芹沢銈介を招いて型染講習会開催。
- 昭和9年(1934年)
- 2月 芹沢銈介の東京転出を機に静岡市で芹沢銈介染色作品頒布会開催。
 * 発起人は高林兵衛、中村精、内田六郎、柳悦孝、平松実等浜松関係者。
- 4月 外村吉之介、柳悦孝、西ヶ崎工房から袋井町大門に転出。
- 9月 芹沢銈介(当時静岡市在住)、東京に転出、東京・蒲田に工房を構える。
- 昭和10年(1935年)
- 8月 誠心高等女学校の工芸部主催、芹沢銈介を招いて個展と染色講習会開催。
- 昭和11年(1936年)
- 6月 浜松民芸運動十周年と日本民藝館開館を記念して、浜松民芸同好会主催「日本民藝品展覧会」が浜松商品陳列所で開催。
 * 同好会は内田六郎、高林兵衛、中村精、平松実、山本気太郎、吉沢純道。既に「日本民藝美術館」は閉鎖、高林、平松、中村、内田所蔵品を主に展示。
- 6月 中村精『民藝と濱松』(私家版)を発行。
 * 10年にわたる遠州の民芸運動について執筆したもの。
- 10月 東京・駒場に「日本民藝館」開館(10/24)。
- 昭和13年(1938年)
- 10月 浜松市常盤町に遠州病院開院。
- 昭和14年(1939年)
- 4月 中村精、慶応義塾大学に招聘され、商工学校の教員になる。

* 鈴木直之『幻の日本民藝美術館——遠州の民藝運動とその群像』(種月文化集団、1992年)を基本に、『民藝四十年』(岩波文庫、1984年)、『教育と民芸につくした中村精』(浜松読書文化協会、1995年)、『遠州民芸運動の資料展』(遠州民芸同好会、1991年)なども参考に、黒田が作成した。

注

- 1) 日本民藝館 HP <http://www.mingeikan.or.jp/>
- 2) 「日本民芸館館長にデザイナー深沢直人氏」日本経済新聞 2012年7月27日
- 3) 新美術館基本構想策定委員会『浜松市 新美術館基本構想』浜松市、2010年

参考資料

1. 『教育と民芸につくした中村精』浜松読書文化協会、1995年
2. 『遠州民芸運動の資料展』遠州民芸同好会、1991年
3. 『開發 中村精遺稿集』平松実、1974年
4. 鈴木直之『幻の日本民藝美術館——遠州の民藝運動とその群像』種月文化集団、1992年
5. 「特集：柳宗悦 心眼の美」『季刊銀花 第54号』文化出版局、1983年
6. 「特集：日本の民芸」『太陽 No.74』平凡社、1969年
7. 熊倉功夫『民芸の発見』角川書店、1978年
8. 熊倉功夫、吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』思文閣出版、2005年
9. 岡村吉右衛門『柳宗悦と初期民藝運動』玉川大学出版部、1991年
10. 柳宗悦『民藝四十年』宝文館、1958年
11. 柳宗悦『民藝四十年』岩波文庫、1984年
12. 柳宗悦『工藝文化』岩波文庫、1985年
13. 柳宗悦『工藝の道』講談社学術文庫、2005年
14. 竹原あき子、森山明子監修『日本デザイン史』美術出版社、2003年
15. 日本民藝館 HP <http://www.mingeikan.or.jp/>
16. 新美術館基本構想策定委員会『浜松市 新美術館基本構想』浜松市、2010年